

からまつ（北原白秋）

一、からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見ぎ
からまつはさびしかりけり。
旅ゆくはさびしかりけり。

二、からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつづけり。

三、からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四、からまつの林の道は、
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそほと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五、からまつの林を過ぎて、
ゆるしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

六、からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

七、からまつの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るのみなる。

八、世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ

解説 落葉松は、詩人・北原白秋が大正十年十一月発行の「明星」で発表した作品。講習会に参加するため、同年夏に長野県軽井沢の星野温泉に滞在していた北原白秋は、宿近くに広がる落葉松林の風景を愛し、毎朝の散歩を欠かさなかったという。

語釈 ※しみじみ〓心の底から深く感じることに。

※さびしかりけり〓寂しいものだ。

※ひともかよひぬ〓人々も通っていた。

※さびさびと〓いかにも寂しい様子。〓ゆるしらず

〓理由も知らず。〓歩みひそめつ〓わけもなく、そつ

と歩いた。〓浅間嶺〓浅間山のこと。〓いよよしづ

けし〓いよいよ静かだ。〓かんこ鳥鳴ける〓とても

寂しい。〓あはれ〓人の世は寂しく孤独であること。

〓常なけど〓無常むじょうで儂はかない。〓うれし

かりけり〓嬉しいことだ。〓山川〓山の中の溪流。

通釈

(一) 落葉松の林の中を通りすぎて、しみじみとみた。落葉松は寂しいものだ。また、旅も寂しいものだ。

(二) 落葉松の林を出て、また林に入った。落葉松の林には細い道が続いていた。

(三) 落葉松の林の奥も自分が通る道があった。霧雨がかり、風が通う道だ。

(四) 落葉松の林の道は自分だけか。人々も通っていたのだろう。この道は細々とした道でさびしく静かな心をいさながら通る道である。

(五) 落葉松の林を過ぎて、訳もなくそつと歩いた。落葉松は寂しいものだ。だから、落葉松とそつと囁いた。

(六) 落葉松の林を出て、浅間山の煙が立つのを見た。再び見た。落葉松の林の上に流れるのを。

(七) 落葉松の林に降る雨は寂しいけど静かに流れている。かんこ鳥鳴けるのみ。林に降る雨で

落葉松の林が濡れた。

(八) 世の中は、寂しく孤独である。無常だけど嬉しい。山の中の溪流の音。落葉松の林に吹く風は、落葉松の風である。